

## 【CSO セミナー第2回報告】

去る8月16日(月)に第2回セミナー「環境、資源、そして調達」を開催しました。講師には、株式会社レスポンスアビリティ代表取締役 足立直樹さんと、(特活)日本国際ボランティアセンター(JVC)・恵泉女学園大学特任准教授 高橋清貴さんをお招きしました。前半は講師のお二人からそれぞれお話をいただきました。

### 企業と生物多様性 ～なぜ企業は生物多様性に取り組まなければならないのか～

株式会社レスポンスアビリティ代表取締役 足立直樹さん

#### <生物多様性とは>

COP10 で話し合われる生物多様性条約の三つの目的、1)保護(触れずに残す)ではなく保全(使ってもよい)、2)持続可能な利用、3)遺伝子資源の利用から生じる利益の配分、をよく見ると、全て生物資源を使うことを前提にした条約であることに気付く。これは生物の保護というよりは、経済の条約であり、ビジネスの課題である。私たち一人ひとりも企業も、紙・水・空気が必要。全ての企業が生物多様性に関係している。生物多様性とは、1)多様な生物種が存在すること、2)多様な遺伝子が存在すること(種内の多様性により絶滅を免れることができる)、3)多様な生態系が存在すること、この3つのレベルにおける多様性。現在、生物の大絶滅が過去の100倍～10,000倍のスピードで進行していると言われている。2020年までに地球上の生物の1割が絶滅すると言われている。

なぜ多様な生物が必要なのか。私たちの生活は、供給サービス、調整サービス、文化的サービスの三つの生態系サービスに依存している。生態系サービスの価値は世界のGDPの約2倍。生物多様性版スターンレビューでは、今後毎年約280億ユーロ相当の森林による生態系サービスが喪失するだろうと報告されている。このままでは、世界のGDPの6%が失われることになる。(これは気候変動による影響とほぼ同じくらい)熱帯雨林は生物多様性の宝庫。熱帯雨林のプランテーション開発により植物性油脂が作られている。生物多様性喪失の99.9%以上は人間の活動が原因。企業と生物多様性との接点は、開発過程、操業過程、原材料調達過程、いずれにおいても影響を及ぼす可能性があり、サプライチェーン全体で考えることが重要。

#### <企業による生物多様性への取り組み>

COP10の重要なテーマはポスト2010目標の策定とビジネスと多様性。国内でも各種のガイドラインができています。環境省による企業ガイドラインもある。企業による取り組みも進展している。関係性マップなども作られている(リコーの例)。

生物多様性への取り組みの失敗は企業にリスクをもたらすこともある。例えばネスレのキットカットチョコに使われていたパームオイルのプランテーション(シナール・マス社)が生物多様性に配

慮していなかったため、国際 NGO は痛烈に批判した。WWF はパームオイル購入者を格付けした。11 社が 2015 年までに生物多様性に配慮したオイルに切り替えると宣言した。(ユニリーバ、キャドバリー、ロレアル、ボディショップ等)日本企業はゼロ。認証のついた製品は値段が高いという印象があったが、日用品にも広がってきている。現在日本で売られているリプトンティーバッグに使われる茶葉の 50%がレインフォレストアライアンス認証されたものである。2015 年までに 100%にする予定。積水ハウスは庭に自生種・在来種の樹木を植える提案をおこなっている。家の着工数は増えていないが庭木の植樹本数は 5 年で 2 倍になったとのこと。水産資源についても、一流科学ジャーナル『サイエンス』に「40 年後には海から魚がいなくなる」という論文が載った。海外小売店では MSC 認証付きの魚への切り替えが進んでいる。ASC は養殖についての認証。KRAV はスウェーデンの規格で肉・魚・野菜等が持続可能かどうかについて認証。“びっくりドンキー”を営んでいるアレフは、お店で使うトマトを受粉させるためのハチを外来種から在来種に切り替えた。企業が生物多様性に対する取り組みを進めることも大事だが消費者が後押しすることも大事である。

### 生物多様性と人々の暮らし ～ラオスの村から考える豊かさの意味～

(特活)日本国際ボランティアセンター(JVC)・恵泉女学園大学特任准教授 高橋清貴さん

#### <ラオスの村の生活と森林との関わり>

JVC は 1990 年代からラオスでの活動を開始。ラオスのはのんびりしていて誰でもが好きになる国。人々は豊かな森を大切にしている、家屋の建材から食糧、薬草、布、布団そして、困窮時の現金収入等々、森からの恵みを受けて生活している。ラオス政府は 2020 年までに森林面積を 70%まで引き上げるとしている。人がいて自然が守られており、保護ではなく保全という視点から考えることが重要。生物多様性条約は生態系サービスを受けている人たちの問題も扱う。環境と開発と人権をセットにして考える必要がある。しかし、そんな森(土地)が、「開発」によって村人の知らないところで譲渡され、川の水に廃液が流され飲み水として利用できなくなるといったケースが報告されている。ラオスは内陸国なので、売ることのできるものは木材と水力発電(ダム)。ダム開発によって、村で生活できなくなりタイに出稼ぎに出ている人もいる。最近では中国の自動車産業の成長のために、ベトナム企業によるゴムプランテーションがラオスまで広がってきている。こういう動きに抗うすべを村人は持たない。1994 年に森林法が制定され、森林の使い方に7つの区分が決められた。JVC は、この区分を村人参加で行うことに取り組んだ。これによって、村人によるクレームが可能になると考えた。だが、実際には、村人は政府の行うことに立場上クレームができない。この法律は“両刃の剣”とも言える。村人は森を利用する権利を与えられると共に、使える土地と使えない土地がはっきりすることで、政府は土地の管理がしやすくなり経済開発を進めやすくなる。村人の権利を尊重し擁護するためには、政府の人達と協議を続け、村人の声が反映される環境を整える

等の活動が必要だ。

### <ラオスにおける王子製紙の植林事業と JVC>

2005 年ラオス政府と日本の製紙企業(王子製紙)による合弁会社が設立され、商業目的の植林を開始した。06 年、村人より、植林の範囲が自分たちの使用していた森まで含んでいると JVC ラオスに報告があった。JVC ラオスは合弁会社を訪問し協議を重ね、同時に JVC 東京も王子製紙本社を訪問し、改善要望書の提出などをおこなった。王子製紙側は要望書に対する回答書の中で、村の境界が不明確なことへの認識がなかったことを認め、村人との対話に努める等の対策を提示するなど真摯な対応をとってくれた。しかしその後、王子製紙はラオス南部に活動拠点を移した。この事例から私たちは一つの教訓を学んだ。「開発」のスピードは速く、村人たちは生き延びるために、仕方なく自らの意識を変えつつ状況に対応していくが、「開発」は進み続ける。NGO の限界を感じた。

### <今後に向けての考察>

問題解決のためには、真の原因はひとつではなく因果関係のネットワーク全体に取り組む必要があるということだ。ステークホルダーによる共通認識をつくる必要があるのだが、その中心となるべきなのは村の住民だ。バリューチェーンの観点から言えば、本社から現地までの垂直的な統合のみならず、他の国、他の会社といった水平的な広がりの中でのバリューチェーンについても考慮する必要があるのではないか。それは、私たち先進国の消費者の意識までつながり、すなわち経済成長の在り方そのものを考え直す時期に来ているのではないか。

### <講師の方々への質疑応答>

◎主にリスク管理についてのコンサルティングをしているが、CSR 調達について気にしている企業が増えている。調達先が CSR 基準を満たしているかわからないと言われるが。

足立氏: サプライヤーは多岐にわたるので全てのサプライヤーに基準を要求するのは難しい。CSR 方針については伝え、監査は主要なサプライヤーからおこなう。第一段階としては、例えば金額ベースで全体の 7~8 割をカバーする。また、金額ベースでは少なくとも、これがなければ製品が作れないという要となる製品を供給しているサプライヤーは優先する必要がある。一次サプライヤーの管理をおこない、一次サプライヤーに二次サプライヤーの管理をお願いするというふうにかスケード状につなげていく。

◎ラオスに土地の所有権はないのか？

高橋氏: 土地の所有は国にあり、村人には利用権が与えられる。

◎認証制度はどういう過程で信頼できるものができるのか？また認証制度は環境保護にどれだけの効果をもたらすか？ラオスは社会主義国だが、その国の社会制度は森林問題の中でどのよ

うな影響を与えているように感じたか？

**足立氏**：森林認証だけでも、各国独自の認証を含めると 50 くらいある。認証制度を作る時に、林業、銀行、流通業等の産業界や NGO、地域住民など様々なステークホルダーとともに作った認証は信頼性が高まる。FSC や MSC はボランティアな組織。作る過程と流通の過程の二つの側面の認証がある。色々な人が加わることで緊張関係を生むことが信頼される要因ではないか。

**高橋氏**：ラオスでは、外国人の行動は見張られている。村人からの相談も物陰で聞く感じ。政府が関わっている認証もガバナンスに問題があり限り、どれほど効果があるか疑わしい。

### <最後に一言>

**足立氏**：企業の方には良いことはもっとアピールしてほしい。大変だと思うが、本質的で競争相手にはできないことをがんばってほしい。それが本当に企業のためになる。消費者はそんな企業を応援してほしい。

**高橋氏**：福岡伸一さんによれば、生命とは分子の流れの澱みみたいなもの。ラオスでは村人は環境と一体化していて、彼らの生命は森からの分子の流れの中にある。そして、その生命という「澱み」を作るのが伝統や文化だろう。経済成長や NGO も含めて開発重視の意識は、ものごとが澱んでいたりあいまいであることを許さない傾向を持つ。そのために、村人が生きづらくなったり、伝統や文化が軽視されるならば、そのことの意味を私たちはもっと真剣に考えるべきだろう。